

三鷹市戦後 80 年平和事業
中学生長崎市
平和交流派遣事業

報告書



はじめに

今年、日本は戦後80年という歴史の節目を迎えました。この間、私たちは幸いにも直接戦争に関わることなく、平和な社会を築き上げてくることができました。これは、筆舌に尽くしがたい幾多の犠牲、そして戦争の惨禍を乗り越えて未来を切り開いてこられた先人たちの多大な努力と英知の上に築き上げられたものであり、私たちはこの尊い平和に深い感謝の念を抱くとともに、その重みを決して忘れてはなりません。

戦争の惨禍を直接経験された方々が年々少なくなる中、過去の記憶が風化しないよう、その声や教訓を次世代に語り継ぐことが、今、私たちに求められています。

三鷹市では、これまでに戦争の「記憶」の継承を大切にし、平和の尊さを次世代へ伝えるため、「平和のつどい」をはじめとする様々な平和事業を推進してまいりました。そして、戦後80年という新たな節目を迎えるにあたり、この平和への取組をより一層深めていく決意を新たにしています。

こうした機会を好機と捉え、平成22（2010）年度以来、15年ぶりに中学生長崎市平和交流派遣事業を実施しました。中学生の皆さんがあなたを訪問し、平和関連施設への視察や現地の中学生との交流を通して平和について深く学ぶことができたのは、平和な未来を切り拓いていくためにも大変意義深いものです。そして、原子爆弾の悲惨さや平和への願いを肌で感じ、自ら考え、行動する貴重な機会となったものと考えています。

平和な世界が揺らぎつつある現代において、未来を担う子どもたちが安心して暮らせる社会を築き、平和をつないでいくことは、今を生きる私たちすべての大切な使命です。私たち一人ひとりが「平和のために今できることは何か」という問いと真摯に向かい、具体的な行動へつなげ、その平和の輪を地域から世界へと広げていくことを切に願います。

この報告書が、長崎市を訪れた中学生たちの学びと経験を共有し、市民の皆様一人ひとりが、改めて平和の尊さについて深く考え、日常生活の中で平和のために何ができるかを問い合わせ、行動へと繋がるきっかけとなることを心から願っています。

令和7年11月 三鷹市長 河村 孝

今年、日本は戦後80年という大きな節目を迎えました。この機会に、三鷹市では未来を担う中学生の皆さんを長崎市へ派遣し、平和について学ぶ貴重な交流事業を実施いたしました。参加された中学生の皆さん、今回の派遣事業を通して、単なる知識の習得にとどまらず、心に深く刻まれる「心の学び」を得られたことを、大変嬉しく思います。被爆地を訪れ、現地の同世代と語り合い、被爆者の声に耳を傾けた経験は、教室では得がたい、生きた学びであり、皆さん的人生においてかけがえのない財産となることでしょう。

報告書に綴られた「My 平和宣言」には、それぞれの視点から平和への願いや、行動への決意が力強く表現されており、心に深く響きます。今回の派遣事業を通じて得られた気づきが、皆さん一人ひとりの「人間力」や「社会力」として育まれ、平和を守り、創り出す力となっていくことを、強く期待しております。

三鷹市では現在、「三鷹市教育ビジョン2027」を策定し、「自らの幸せな人生とより良い社会の創造」を教育の目的としながら、「人間力」と「社会力」の育成を柱に据えた教育の推進に取り組んでおります。今回の平和学習のように、子どもたちが自ら考え、他者と対話し、社会とつながる経験は、まさにこのビジョンの実現に向けた重要な一歩であると確信しております。

この報告書が、長崎市を訪れた中学生たちの学びと経験を広く共有するものとなり、その思いが語られ、地域に広がっていくことは、平和の継承において極めて重要な意義を持ちます。一人ひとりの気づきが、周囲の人々の意識を変え、地域全体の平和への理解を深めるきっかけとなることを、心より願っております。

令和7年11月 三鷹市教育委員会 教育長 松永 透

1 事業概要

三鷹市内の中学校2年生16名が長崎市を訪問し、現地中学生との交流や平和関連施設の視察等を通して、恒久平和について学び、その成果を広く市民に伝えることを目的とした事業です。

2 全体スケジュール

| 事業 | 日程 | 内容 |
|--------|------------------|--|
| 事前学習会① | 7月6日(日) | ・自己紹介 ・講義（三鷹市の戦争の歴史について） 講師：法政大学中学高等学校 牛田守彦氏 |
| 事前学習会② | 7月12日(土) | ・講義（長崎の原爆被害について） DVD「ナガサキの少年少女たち」視聴 ・グループワーク |
| 長崎派遣 | 7月29日(火)～31日(木) | 「3 長崎派遣行程表」のとおり |
| 中間報告 | 8月15日(金) | 「みたか平和のつどい」にて報告 |
| 報告会準備会 | 11月15日(土)、24日(月) | 報告会における発表資料等の作成 |
| 報告会 | 11月30日(日) | ・市長あいさつ ・グループ発表、My 平和宣言 ・教育長講評 |

3 長崎派遣行程表

| 日程 | 訪問先・実施内容等 |
|----------|---|
| 7月29日(火) | 三鷹市役所集合・出発式→羽田空港→長崎空港→昼食（長崎インターナショナルホテル）→平和案内人ガイドツアー（原爆落下中心地、平和公園等）→夕食（ホテル）→ミーティング（1日の振り返りなど） |
| 7月30日(水) | 朝食（ホテル）→長崎市立山里中学校（共同学習、交流会）→昼食（紫瑠璃）→お土産購入（長崎駅）→長崎歴史文化博物館→眼鏡橋→長崎原爆資料館（ガイド付き）→夕食（ホテル）→ミーティング（1日の振り返りなど） |
| 7月31日(木) | 朝食（ホテル）→被爆体験講話（追悼平和祈念館）→大浦天主堂→お土産購入（グラバー通り）→昼食（ANAクラウンプラザホテル長崎グラバーヒル）→長崎空港→羽田空港→三鷹市役所着・解散式 |

4 派遣生（市内在住の中学2年生）

| 氏名 | 学校名 | グループ |
|------------|------------------|------|
| 畔見 太一 | 連雀学園三鷹市立第一中学校 | 1 |
| 高木 和穂 | 連雀学園三鷹市立第一中学校 | 2 |
| 原 擞斗 | にしみたか学園三鷹市立第二中学校 | 1 |
| 清水 栄茉 | にしみたか学園三鷹市立第二中学校 | 2 |
| 高砂 正宗 | 三鷹の森学園三鷹市立第三中学校 | 2 |
| ビリアンテ フェーム | 三鷹の森学園三鷹市立第三中学校 | 1 |
| 井ノ上 智也 | 三鷹中央学園三鷹市立第四中学校 | 2 |
| 池町 望愛 | 三鷹中央学園三鷹市立第四中学校 | 1 |
| 細見 六佑 | 鷹南学園三鷹市立第五中学校 | 3 |
| 石橋 侑奈 | 鷹南学園三鷹市立第五中学校 | 4 |
| 丹野 湊 | 東三鷹学園三鷹市立第六中学校 | 3 |
| 小舟 杏奈 | 東三鷹学園三鷹市立第六中学校 | 4 |
| 横山 翔大 | おおさわ学園三鷹市立第七中学校 | 4 |
| 江川 サクラ | おおさわ学園三鷹市立第七中学校 | 3 |
| 岩田 悠慎 | 私立聖徳学園中学校 | 4 |
| 井上 真由子 | 東京都立三鷹中等教育学校 | 3 |

5 引率者

| 氏名 | 所属等 |
|--------|--------------------------|
| 今井 昂太 | 三鷹青年会議所理事長 |
| 山下 謙介 | 三鷹青年会議所専務理事 |
| 田口 寛輝 | 三鷹青年会議所委員長 |
| 斎藤 将之 | 三鷹市教育委員会教育部指導課教育施策担当課長 |
| 貝原 岳 | 三鷹市企画部企画経営課平和・人権・国際化推進係長 |
| 五十嵐 由梨 | 三鷹市企画部企画経営課平和・人権・国際化推進係 |

6 事前学習会① 日時：令和7年7月6日（日）午前10時～正午 場所：三鷹産業プラザ

派遣に先立ち、派遣生同士の顔合わせや事業説明に加え、自分たちが住む三鷹における戦争の歴史について事前学習を行いました。

◆オリエンテーション

本事業の趣旨や目的に加えて、事業全体及び事前学習会について説明しました。

◆参加者自己紹介

参加者全員より自己紹介を行い、氏名、学校、本事業への参加理由や意気込みを発表しました。また、各グループで趣味や部活動等について互いに質問し合う時間を設け、共に学ぶ仲間について知り、親睦を深める場としました。



◆講義「三鷹と戦争」

法政大学中学高等学校教諭の牛田守彦先生を講師にお招きし、長崎での学びをより深くするためにするため、自分たちが住む三鷹における戦争の歴史について学ぶ講義を実施しました。身近な場所で過去に何が起きたのかを知ることで、戦争と平和を「自分ごと」として捉え、主体的に考えるきっかけとすることを目的としました。



◆まとめ

平和学習の一助となるよう、市が実施する平和事業「みたかデジタル平和資料館」を紹介したほか、今後の予定等の説明を行いました。最後には、本事業のスタートを記念し、集合写真を撮影しました。



7 事前学習会② 日時：令和7年7月12日（土）午前10時～正午 場所：三鷹産業プラザ

長崎での原爆被害を学習するため、DVD「ナガサキの少年少女たち」を視聴したほか、グループワークを実施しました。その後、戦争が起きてしまう理由や本事業における自分たちの「役割」等について意見交換し、話し合ったことをグループごとに発表しました。

◆オリエンテーション

事前学習会②の実施内容を説明したほか、前回の事前学習会①で寄せられた質問に回答しました。

◆DVD「ナガサキの少年少女たち」の視聴

原爆を知らない世代に真実を伝えるために長崎市が戦後50年を機に制作した「ナガサキの少年少女たち」を視聴し、原爆投下に至る経緯や被爆直後の惨状、復興、そして平和推進運動等について学習しました。



◆グループワーク

4人×4グループに分かれ、講義やDVD視聴により感じたこと、戦争が起きてしまう理由、中学生である自分たちが長崎で学習する意義や役割について意見交換し、出た意見を発表資料としてまとめ、発表しました。（各グループが作成した発表資料は5ページ）

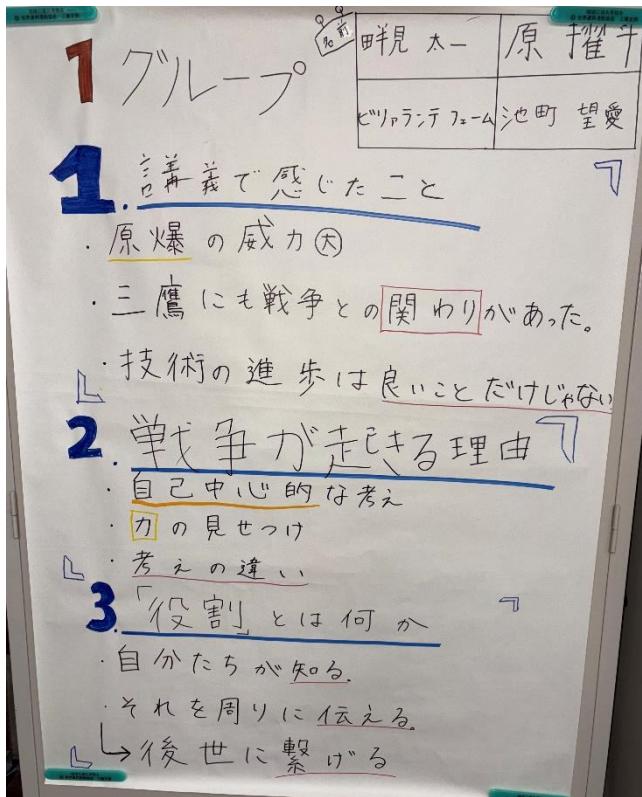


◆まとめ

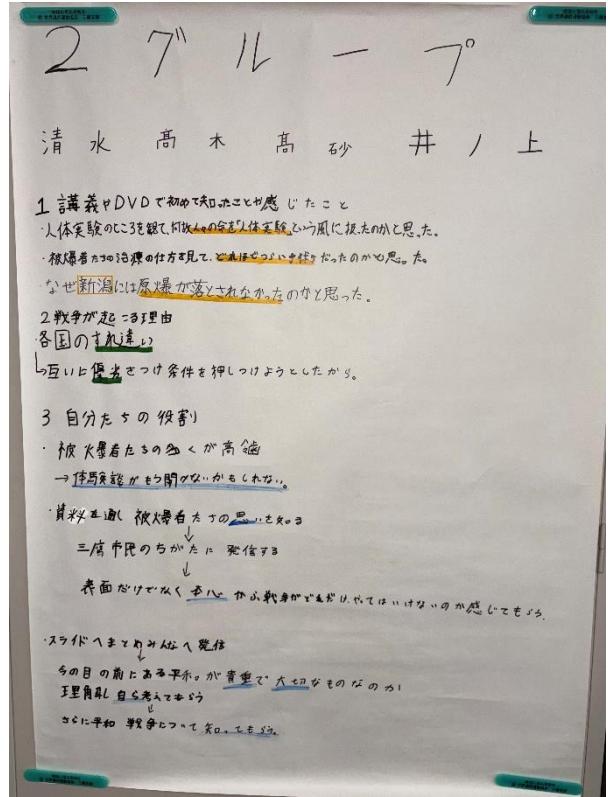
今後の予定や派遣当日について説明したほか、引率者の三鷹市教育部指導課教育施策担当課長よりグループ発表に対する講評や派遣に向けての心得などを伝え、閉会の挨拶を行いました。



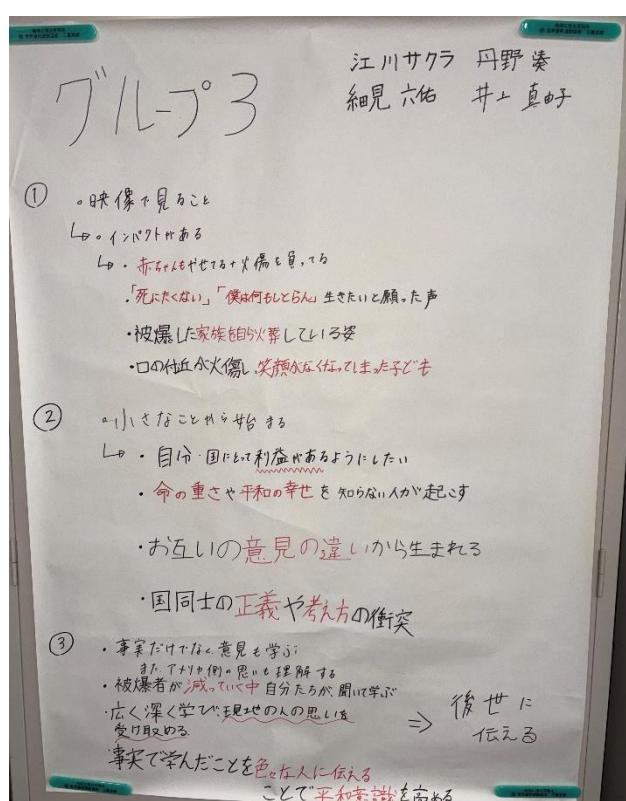
《事前学習会②のグループワークで各グループが作成した発表資料》



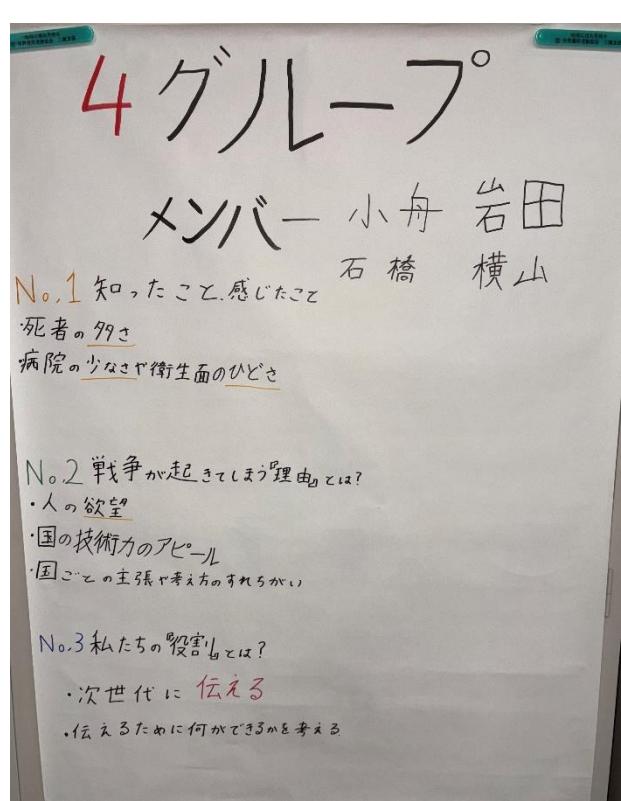
グループ1



グループ2



グループ3



グループ4

8 長崎派遣 1日目（7月29日）

◆市役所で出発式

出発の朝には派遣生の保護者や市、教育委員会の職員が駆け付け、派遣生を見送りました。



◆平和案内人ガイドツアー

長崎空港に到着し昼食をとった後、現地のボランティア「平和案内人」の案内のもと、原爆落下中心地や浦上天主堂、平和公園などを約2時間かけて見学しました。炎天下での見学となりましたが、派遣生たちは実際に被爆の痕跡を目の当たりにすることで、資料や映像だけでは得られない、より深い理解と確かな実感を伴う貴重な学びの機会となりました。

《訪問先》

原爆落下中心地→浦上天主堂→如己堂・永井隆記念館
→山里小学校（旧・山里国民学校）→平和公園



◆ホテルでのミーティング

夕食後にミーティングを行い、平和案内人ガイドツアーで感じたことや印象に残ったことなどをグループで共有しました。また、派遣2日目の山里中学校との交流事業や8月15日の中間報告における発表者を話し合いのうえ決定しました。最後には、市民の平和意識向上への方策や若い世代へ伝えていくためのPR方法などについても検討しました。



9 長崎派遣 2日目（7月30日）

◆山里中学校との共同学習・交流会

長崎市立山里中学校（原爆落下中心地から約900mに位置し、原爆により一瞬にして焦土と化した惨劇の地）を訪問し、年間を通じて平和活動を続ける「平和部」の生徒と共同学習・交流会を実施しました。三鷹市の派遣生から「三鷹市の戦争の歴史」を、山里中学校の生徒からは「平和部」の取組をそれぞれ発表するとともに、両生徒混合で4グループに分かれ、「平和のために自分たちにできること」をテーマにグループワークを行い、意見を交換しました。最後にはグループの代表者から話し合ったことを発表しました。



三鷹市派遣生も
グループ代表として発表しました



《グループワークでの主な意見》

- ・戦争について自分がまず知り、それを身近な人に伝えていくことが大切。
- ・一人ひとりが平和を考え、自分の意見を持つ。
- ・お互いの良いも悪いも認め合う、尊重し合う。
- ・若い世代も关心・責任を持つ。



平和部のみなさん
の意識の高さにびっくりしました

◆長崎歴史文化博物館と眼鏡橋の見学

平和学習だけでなく、長崎の「海外交流史」をテーマとした長崎歴史文化博物館や観光地の眼鏡橋を見学しました。



ハートストーン
発見！



◆長崎原爆資料館の見学

現地のボランティア「平和案内人」の案内ののもと、長崎原爆資料館を見学しました。派遣生たちは、被爆資料や惨状を示す写真展示、原爆投下に至る経緯や核兵器開発の歴史、平和希求を訴える展示などを通じて、原爆被害の甚大さや非人道性、被爆者や遺族の苦しみといった被爆の実相を学び、平和の尊さについて深く考えました。



長崎原爆資料館 所蔵



長崎原爆資料館 所蔵



長崎原爆資料館 所蔵



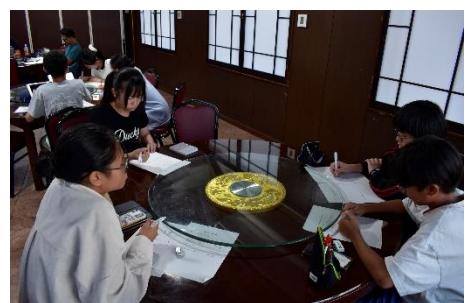
長崎原爆資料館 所蔵



長崎原爆資料館 所蔵

◆ホテルでのミーティング

夕食後にミーティングを行い、山里中学校との交流学習や長崎原爆資料館の見学を通じて感じたことや印象に残ったことなどをグループで共有しました。また、山里中学校で実施したグループワークの振り返りを行うとともに、11月に実施する報告会の発表方法等についてグループで考えました。



10 長崎派遣 3日目（7月31日）

◆朝の散歩(希望者のみ)

最終日の朝には、朝食前にホテル周辺を散歩しました。リラックスした雰囲気で長崎原爆資料館にある展望デッキや爆心地公園等を散歩し、今回の派遣事業の思い出をさらに深めました。



◆被爆体験講話(追悼平和祈念館)

国民学校5年生（11歳）のときに爆心地から1.3km離れた場所で被爆された松尾幸子さんから、被爆当時の体験やその後の苦しみ等について直接お話を伺い、原爆の悲惨さや平和の尊さを学びました。派遣生たちは真剣に耳を傾け、被爆者の言葉一つひとつを胸に刻みました。



◆大浦天主堂の見学

行程の最後には、日本最古のカトリック教会である大浦天主堂を見学し、見学後はグラバー通りでお土産を購入しました。



◆市役所で解散式

2泊3日の派遣事業を終え市役所に到着した派遣生は、保護者や市職員らに迎えられ解散式を行いました。式では派遣生2名が代表して感想を発表し、貴重な体験や学びから得た平和の尊さや次世代に伝えていくことの重要性など、自身が率直に感じたことを報告しました。

派遣生による 報告書

「平和の持続」

グループ1

連雀学園三鷹市立第一中学校 畔見 太一

私は、長崎平和派遣事業に参加し、さまざまなことを学びました。長崎では、原爆被害に対する思いを知り、平和に向けての今までの努力に关心を持ちました。そして、自分はどうすれば平和の実現に近づくことができるのかを考えました。

私は長崎での三日間で、知ることに力を入れました。それは、私が平和を伝えていくためには、当時の悲惨さを知ることが大切だと思ったからです。そのため、写真よりもメモを取ることを重視して、数字などの情報だけではなくその時の気持ちも書き留めました。長崎で行った長崎平和記念公園、山里中学校、原爆資料館、どこへ行っても新鮮に感じ、楽しかったです。しかし、楽しさを感じると同時に、当時の情景を知りました。私はその悲惨な出来事を知って、原爆の恐ろしさを実感しました。そして、その恐ろしさを伝えることの大切さを改めて実感しました。長崎では、被爆者の方からのお話という貴重な体験もでき、とてもためになりました。また、長崎平和派遣事業で関わった山里中学校の平和部は、今の現地の人の考え方や姿勢が立派で、自分のできることを精一杯頑張っていました。そこから私もこれから発表会やそれ以外の受験などもできることを精一杯頑張り、できることにも挑戦したいと思いました。

初めていく長崎では不安なこともありましたが、メンバーと打ち解ける中でだんだんと楽しく過ごすことができました。この貴重な体験をこれから日常生活に役立てられるよう頑張ります。



My 平和宣言
～私にできること～

知ることで 今ある知識
広めよう 平和を守る
そして繋げる

「中学生長崎市平和交流派遣事業で学んだこと」

グループ2

連雀学園三鷹市立第一中学校 2年 高木 和穂

今年で戦後80年の節目の年となりました。現在、原爆で被爆された方はどんどん少なくなっています。そのため、私たちは「原爆を知ること」と「原爆について伝えていくこと」が重要になります。私が今回の事業で学んだことや感じたことは主に三つあります。

一つ目は、平和ガイドツアーで平和の泉を回った時のことです。平和の泉には「のどが乾いてたまりませんでした 水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました どうしても水が欲しくてとうとうあぶらの浮いたまま飲みました」とありました。この文章からは、油が浮いていても水を飲んでしまうくらいぎりぎりの状態であったと分かります。それにより戦争の悲惨を感じることができました。

二つ目は、被爆体験講話で松尾さんにお話を聞いた時のことです。私が印象に残っているのは、松尾さんが、道端で被爆して真っ黒になって亡くなっていた子どもの様子を見たとおっしゃっていました。また、その男の子の遺体は、原爆が起きた年の翌年の春になるまでその場にあったということもおっしゃっていました。その話を聞いて、人を真っ黒にしてしまう原爆の恐ろしさや長い間遺体が放置されてしまうほど余裕が無かつたことが分かりました。

三つ目は、山里中学校を訪問した際に感じたことです。それは、山里中学校と三鷹市の中学校では「原爆について考える」に対する意識に大きな差があったことです。例えば、山里中学校では「平和部」という平和についての部活があったり、「平和の日を受け継ぐ集会」という集会があります。三鷹の中学校にはそのような取り組みがありません。私は、山里中学校の生徒さんとの交流や今回の事業で学んだことをより調べるなどをし、その成果を多くの人（学校の人など）に伝えて原爆について興味を持ってもらいたいです。

現在は、日本では戦争は行っていません。しかし世界の国々では戦争が行われています。戦争は多くの罪なき人々を殺す、人々を不幸にする行為です。私は、もう戦争を起こしてはいけないと思います。その為にも皆さん、戦争について調べて誰かに伝えてみてください。それが平和への第一歩になると信じています。どうかよろしくお願ひします。



My 平和宣言
～私にできること～

身近な人からでも良いから
原爆について伝えていく！

「伝えなければならないこと」

グループ1

にしみたか学園三鷹市立第二中学校 2年 原 擞斗

私は、2泊3日の派遣事業でたくさんのこと学びました。その中から特に伝えたいことをいくつか紹介します。

1つ目は被爆者の方のお話です。実際の被爆者の方のお話しを聞かせて頂ける、貴重な機会でした。まず印象に残っていることは、爆発による強い光が発生し、ふとした瞬間には10mも爆風に飛ばされていたことや、ひどいやけどをした人は皮膚がただれていたということです。爆発の威力がとても強かったということがよくわかりました。被爆者の方のお話の中で次に印象に残ったことは、爆発から生き残った人が、その後も後遺症に苦しんでいたことです。爆発から逃げ切っても、放射線による白血病などの後遺症に悩まされている人が大勢いることにとても驚きました。お話しして下さった方は、今も甲状腺機能低下症という後遺症に苦しめられているという事実を知り、まだ原爆で苦しんでいる方がいるのだということに胸がとても痛くなりました。

2つ目は、平和案内人ガイドツアーです。平和案内人ガイドツアーは私たちの住んでいる三鷹では見ることができない物ばかりでとても勉強になりました。例えば、原爆が爆発した当時の地層の中に昔のコップやカップなどの破片があり、その当時の惨状をイメージすることができました。また、当時の教会跡がありましたが、門の片方しか残っていないなく、原爆がどれだけ凄まじかったのかがその門を一目見ただけでわかりました。紹介した2つは現地に行かないと見ることができない物なので、機会があれば皆さんにも一度現地に行って見てもらいたいと思いました。

この派遣事業に参加して、参加前よりも一層、戦争の恐ろしさや悲惨を感じることができました。派遣事業で学んだことを周りの友達や家族に伝えていきたいです。



My 平和宣言
～私にできること～

若い世代に向けて
平和について発表する！

「戦争への想い」

グループ2

にしみたか学園三鷹市立第二中学校 2年 清水 栄茉

私は、今回の長崎派遣を通して自分の戦争に対しての想いと伝え方を改めました。長崎へ行く前の私の戦争への想いは、原爆の被害や惨さを忘れないようするべきだと思っていました。しかし、今回の3日間を通して被害を忘れるだけでなく、被爆者の方々の想いを途絶えさせないことも原爆を伝えることと同じくらい大切なことであると感じました。

私の中で印象に残ったことは、長崎原爆資料館で拝見した焼き場に立つ少年という写真と語り部の松尾さんのお話です。焼き場に立つ少年は、傍にあった説明によると、原爆によって弟を失い、両親も周囲におらず一人で死体焼き場に立っていた10歳くらいの少年の写真だと言います。10歳といえば今的小学五年生と同じ年齢です。まず、この写真を見た時、写真に写っている男の子はこの後どのように生きていったのかと思いました。それと同時に、自分がこの少年と同じ立場に置かれてしまった時に、自分は写真の少年のように現実を受け止め、未来を見て歩んでいくことはできないと感じました。そして、写真の少年のように家族みんなを失い、一人で生きていくことになってしまった少年や少女が原爆の被害に限らず、当時はたくさんいたと言われ、幼い多くの子供を一人にしてしまうほど戦争は民間人関係なく皆を襲ったのだとわかりました。そして、松尾さんのお話では本などの文章面で受け取るものとは違い、実際に体験された方が話していたことによる当時の雰囲気や人々の心情、今の生活とは全く異なる価値観がすぐ目の前にあるかのように伝わってきました。さらに、松尾さんが最後におっしゃっていた、核兵器は一刻も早く世界から無くなつてほしい、戦争について何も知らないということが一番恐ろしい、という言葉を聞いた時、私はこの想いも受け継ぐべきことだと思いました。

このような長崎での体験から、わたしは平和と戦争をより鮮明に語り継いでいくためには起こった出来事だけでなく、その時代の方々の想いも同時に受け継いでいくことが大切だと思いました。また、私が戦争を伝える時には、日本はただの被害者ではなく、他国に被害を与えた加害者でもあるという事も忘れずにいたいと思います。



My 平和宣言
～私にできること～

原爆や戦争を知らない人を
一人でも多く減らすために
まずは知人と戦争に対する
知識を教え合う！

「私が平和のためにできること」

グループ2

三鷹の森学園三鷹市立第三中学校 2年 高砂 正宗

私たちが日々当たり前のように過ごしている平和な生活は、実は多くの人々の尊い犠牲の上に成り立っているものです。特に、長崎の原爆投下の歴史を考えたとき、平和の大切さを強く感じることができます。1945年8月9日、長崎に原子爆弾が投下されました。一瞬にして七万人もの命が奪われ、街に壊滅的な被害を与え、長崎は廃墟と化しました。原爆の恐ろしさは、爆弾による直接的な被害だけではなく、その後に続く放射線の影響にもあります。家族や友人を失った人々、80年たった今もなお後遺症で苦しんでいる人たちがいることを知ると、戦争の残酷さを強く感じます。

私は今回、三鷹市の平和派遣事業で長崎の原爆資料館を訪れました。資料館では、焦げた衣服や壊れたおもちゃ、残された手紙などが展示されており、当時の長崎の人々は原子爆弾が落ちる瞬間まで、あたりまえの日常を送っていたことを実感しました。ただものが壊れた、消えたというだけではなく、そこで生活していた人の命、希望、夢、全てを容赦なく奪われたことを目の当たりにした時、苦しくて胸が締めつけられる様な思いでした。

この経験をしてから私は、平和とは何かを考えてみました。戦争がないことが平和だと感じるかもしれません、それだけでは不十分なのだと思います。平和とは、誰もが安心してあたり前の日常を送れる社会であり、暴力や争いのない世界を意味します。

平和のために私にできることは本当に小さな事です。まず一つ目は、日々の生活の中で友達を思いやり、他の人の気持ちを理解し助け合うこと、それが私にできる平和な社会を作る第一歩です。学校や家庭でのふとした言動や行動が大きな変化につながるかもしれません。自分自身が変わることで、少しずつ周りの世界を良くしていくのではないかと感じています。そして二つ目は、『80年前に起こった悲劇を繰り返してはいけない』と願い、伝えていくことが私にとっての平和への第一歩です。

私にとっての平和は、誰もが幸せに暮らせる世界です。争いがない優しさが広がる世界を目指して私にできることを続けていきたいと思います。



My 平和宣言
～私にできること～

平和への道の第一歩は
自分自身が変わること！

「未来のために」

グループ1

三鷹の森学園三鷹市立第三中学校 2年 ビリアンテ フェーム

原爆と聞くと、私は広島を思い浮かべます。ニュースや教科書でよく取り上げられていたからです。しかし、二つ目の原爆が投下された長崎については、学ぶ機会が少ないと感じていました。そこで私は、この夏、実際に長崎を訪れることになりました。

長崎では、原爆落下中心地や平和公園を巡り、当時の街の様子や被害について学びました。その中でも特に印象に残ったのは、平和の泉です。水を求めて亡くなった人々のために造られたと聞き、普段の生活で水をどれほど贅沢に使っているかを実感しました。

また、原爆の体験者である松尾幸子さんの話を聞く機会がありました。松尾さんは、家族と共に原爆を経験しました。お母さんの目には大きなコブができ、弟さんはやけどで体から白いものが見えたといいます。その話を聞いたとき、私は胸が痛み、もし自分の家族に起きていることだったら私はどうしただろうかと考えました。けれど、次の日には父親と再会し、家族で泣きながら喜び合ったそうです。その姿を想像すると、家族の大切さを改めて強く感じました。

普段、当たり前のように話せている家族を、一瞬で奪ってしまう戦争に恐怖を感じました。だからこそ、二度とあってはならない。そのためには、今ある日常の幸せに気づき、感謝をすることが大事だと私は思います。戦争を経験している人たちは、私たちに平和の尊さを伝えられる時間が限られています。だからこそ、私たちが平和を伝えていくこと、平和を守り続けることが私たちに求められていると学びました。日本に住む外国人として、私はこの思いを母国にも伝えていきたいと思います。



My 平和宣言
～私にできること～

普段の日常に感謝をし、
学んだことを自分の母国に
伝えていく

「未来へ繋ぐ平和への思い」

グループ2

三鷹中央学園三鷹市立第四中学校 2年 井ノ上 智也

私は「長崎市平和交流派遣事業」に参加し、実際に長崎の地を訪れて、戦争や原爆の恐ろしさ、そして平和の大切さについて深く学びました。教科書や映像で見たことはありましたが、実際に被爆地に立ち、被爆者の方々のお話を聞くことで、平和の重みを自分の心で強く感じることができました。

原爆資料館を訪れた時に、たくさんの遺品を目にしました。どれも「戦争は人間の命や生活を一瞬で奪ってしまう」という現実を突きつけてきました。特に、当時まだ子どもだった人たちが、何も知らないまま親を亡くしてしまう辛さを思うと、胸が引き裂かれるような気持ちになりました。もし、自分がその時代に生きていたら、家族を突然失ったかもしれない。そう考えると、戦争は遠い昔の出来事ではなく、自分自身に置き換えて考えることだと気づきました。

また、被爆者の方のお話を聞く機会がありました。体験を語る声は静かでしたが、一つ一つの言葉がとても重く、心に深く残りました。戦争の恐ろしさを知っている人が年々少なくなっていく中で、語り継ぐことの大切さを強く実感しました。私たち中学生がその思いを受け止め、次の世代に伝えていくことが使命なのだと思います。

今回の学びを通して、平和は「当たり前」ではなく、多くの犠牲の上に成り立っている貴重なものだと分かりました。毎日の学校生活や友達との楽しい時間、家族と過ごす日常は平和だからこそ守られているのです。この平和を当たり前だと思わず、感謝しながら生きたいと思いました。そして、自分にできることは小さなことかもしれません、身近な人を大切にし、争いごとを避け、相手の気持ちを考えて行動することが、平和への一歩だと思います。

長崎で学んだことを心に刻み、僕は、これからも「平和の大切さ」を語り継ぐ一人でありたいです。未来の世界が、二度と同じ過ちを繰り返さず、誰もが安心して暮らせるものであるように、僕自身も努力を続けたいと思います。



My 平和宣言
～私にできること～

相手を思いやり、
平和の心を広げていく

「私たちにできること」

グループ1

三鷹中央学園三鷹市立第四中学校 2年 池町 望愛

戦後八十年を迎えたこの夏。被爆地である長崎県に行き、現地で学ぶ機会をえてもらいました。それは、私にとってとても貴重な経験となりました。この事業の案内を聞いた時に私は原爆投下について何を知っているのだろう？とふと思いました。また、今後は被爆体験された語り部の方もご高齢となり、お話を聞ける機会は少なくなっていくと母から聞きました。東京に住んでいる私たちは尚更のことだとの思いから、ぜひ行ってみたいと応募しました。

長崎では原爆資料館に行ったり、被爆体験者の方のお話を聞いたりと、自分の目や耳で直接その体験を目の当たりにしました。「どれだけ悲惨なのか。」「本当にあっていいのか。」とても衝撃を受け、中には目をそむけたくなるような展示物もあり、それは、たった一発の原子爆弾で人間が人間ではなくなってしまった記録でもありました。全身が真っ黒こげになっている人。深い傷口から白いものが見えていている人。蒸発している人。人だけでなく動物も苦しんでいる。言葉を探しても見つからないほどの残酷さで唖然としました。インターネットやニュース、本で読むよりも、自分の目や耳で壮絶な過去があったということを知り、凄惨さがひしひしと伝わり、平和がどれほどありがたく大切なものを実感することができました。

また、現地の山里中学校の生徒の皆さんと交流してみて、同じ中学生なのに平和について真剣に考えていてとても驚きました。平和部という部活動があり、日頃から長崎の原爆投下の事実と平和の尊さをどのようにして伝えていくかを学んでいます。その姿を見て、意識が高く、素晴らしい活動だと思いました。平和部の子に三鷹の学校には平和部がないということを伝えると、とても驚いていました。平和部の皆さんの活動に感銘を受け、自分も平和に対する意識が高まると共に、三鷹に住んでいる中学生も平和について今よりももっと関心を持ってほしいと思いました。

今年は原爆投下から八十年を迎えました。十年後、戦争や原爆を体験した人がいなくなってしまうと言われています。当時の記憶を風化させないために、先ほど述べたように若い世代の人たちが学び、継承していくべきだと思います。語り部の方は、どんな方法であってもいいから次の戦争を知らない世代に戦争の愚かさと悲惨な事実を知ってもらい、多くの人に伝えていくと懸命に話してくださいました。過去を受け止め、平和についてひとりひとりが考え、それを身近な人に伝えていくことで平和への意識が少しずつ変わっていくと思います。長崎が永遠に最後の被爆地であることを願い、いつか武器を持たずとも分かり合える世界になりますように…



My 平和宣言
～私にできること～

戦争の愚かさを知り、
身近な人に伝えていく
小さな平和について考える

「長崎で学んだ平和の尊さ」

グループ3

鷹南学園三鷹市立第五中学校 2年 細見 六佑

私は、授業で学んだ戦争や原爆のことに対する興味を持ち、戦後80年を迎えるにあたり行われた長崎派遣事業に参加しました。教科書の写真や先生の話だけでは分からず、人々の悲しみや平和への願いを、実際に現地で感じてみたいと思ったからです。

まず、長崎に着いて最初に訪れたのは、原爆落下中心地と平和公園です。そこでは、平和案内の方々の案内を受けながら、様々なところから送られた平和への祈りがこもった像やモニュメントを一つ一つ見て回りました。そして、青空にそびえる平和祈念像が目に入りました。平和祈念像の右手で原爆の脅威を、左手で平和を象徴していると教わりました。しかし、この像を当時の人全員が良く思っていた訳ではないということも教わりました。

『何も彼もいやになりました。原子野にきつ立する巨大な平和像それはいいそれはいいけどそのお金で何とかならなかつたのかしら“石の像は食えぬし、腹の足しにならぬ”さもしいといって下さいますな原爆後十年をぎりぎりに生きる被災者の偽わらぬ心境です。』（『ひとりごと』福田須磨子 1955年8月11日朝日新聞掲載）

この詩の内容は、原爆投下から10年後、被爆者の生活がまだ苦しい中で、平和祈念像の建設に巨額の費用をかけることへの疑問や複雑な思いを表したものでした。「石の像は食べられない」という言葉を聞き、私は複雑な気持ちになりました。平和を願う気持ちは素晴らしいけれど、当時の人々にとっては、まず生きることが最優先だったのだと思います。平和の形は一つではないと考えさせられました。

その後、原爆資料館を訪れました。展示されていた焼け焦げた弁当箱や変形したガラス瓶、原爆が投下された時間で止まっている時計、想像していた何倍もの大きさのファットマン（長崎に落とされた原爆）の模型、被爆した人々の写真などを見て、胸が締めつけられました。それは、授業で見た写真よりもずっと強く心に響きました。さらに、被爆者の方から直接話を聞きました。その方は「戦争は絶対に駄目です。核兵器は一日でも早くなくさないといけません。そして、戦争の愚かさを多くの人に知ってもらいたい」と話してくれました。その言葉は、とても重く、心に深く響きました。

今回の平和事業を通して、戦争や核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを改めて学ぶことができました。この体験は、単に過去の出来事として知るだけでなく、自分自身がこれからどのように生きるべきかを考える機会となりました。今も世界のどこかでは戦争が起きているというのが現状です。平和は決して当たり前ではなく、尊いものであり、私たち一人一人が作っていくものであると実感しました。そのような平和を今後どのように守り、続かせていくかを考えていきたいと思います。



My 平和宣言
～私にできること～

平和の大切さを伝えていく

「平和の大切さ」

グループ4

鷹南学園三鷹市立第五中学校 2年 石橋 侑奈

私は映画や漫画が好きで、戦争に関する映画を見た時に『教科書だけでは学べないものを学び、より深く戦争の出来事について知りたい』と思いました。これが、私が今回の長崎平和派遣事業に参加した大きな理由です。長崎では、原爆の爆心地や資料館、当時被爆した山里中学校の生徒との交流など、様々な体験をした中で、私が印象に残った事が三つあります。

一つ目は、平和像を見たことです。平和像自体は写真で何度か見た事はありましたが、実物は初めて見ました。右手は原爆の脅威を、左手は平和を、そして、閉じた目は戦争犠牲者の冥福を祈ることを象徴していると案内をしてくださった方が説明をしてくれました。その形の意味と像の大きさを見て、戦争が起こらないことは当たり前ではない、と平和の大切さを改めて実感しました。

二つ目は、爆心地に最も近い場所で被爆した山里中学校の生徒との交流です。山里中学校には『平和部』と言う部活動があり、部員たちは平和についての考えを深めています。山里中学校の生徒は、日々の学校での活動として、黒本の朗読や平和活動をしている方との交流など、平和学習に一人一人が真剣に取り組める環境があることを聞き、私の住む地域にはないことだったので、驚きました。共同グループ学習では、山里中学校の生徒と、『平和を伝えるために私たちができる事』を話し合いました。東京と長崎の場所や環境、特性を活かしたそれぞれの異なる視点から意見を出し合いました。SNSでの発信や、黒本の朗読の取り入れなど、様々な意見が出て、自分でできることを実践してみたいと思いました。

三つ目は、被爆体験講話を聞いたことです。今回語り手をしていただいた方は11歳の時に被爆し、山にいたおかげで助かったという方でした。当時の小学校の様子や服装、防空壕での様子など、たくさんのこと話をしてくれた中で特に印象に残ったお話は、被爆後、軍が通る用の道だけが整備されて、その道の周りは瓦礫と死体が転がっている状態であり、そこを裸足で歩くたび、バラバラになった目や耳を踏んでじゅくじゅくと音がしていたというお話でした。知識だけでは想像できない、実際に被爆した人にしかわからない感情や被爆直後のお話を聴き、より戦争の情景を浮かべることができました。

今、平和の中で生きている私にとって、平和そのものについて考える機会はありませんでしたが、長崎の被爆地では、平和とは当たり前ではなく、誰かが祈り、作り、支えているものだと考える事ができました。戦争経験者の高齢化が進む中、かつて多くいた戦争の語り手の人数も減少し、戦争という出来事が歴史として残されようとしています。そんな今、私にできることは、人に『伝える』ということだと思います。実際に見て、聞いて、感じる事ができたからこそ、より多くの人に戦争の悲劇や平和の尊さを伝え、歴史となっても誰もが平和について深く考えられるように伝えていきたいと思いました。

My 平和宣言
～私にできること～

多くの人に平和の尊さや
核兵器の恐ろしさを伝えていく

「長崎の80年」

グループ3

東三鷹学園三鷹市立第六中学校 2年 丹野 湊

1945年8月9日、上空500mでプルトニウム原爆、通称「ファットマン」が何もかも照らすような閃光とものすごい爆風で長崎を一瞬で灰の街にしました。原子爆弾によって「死者 73,884人」「負傷者 74,909人」合計148,793人、長崎市の人口の半分を優に超えてしまう人数が犠牲になりました。しかし、核兵器はまだなくならず、実験数は2,000件を超え、ことあるごとに使用の危機に晒されています。僕はこの事業を通して、今ある日常の大切さを自覚し、数ある貴重な戦争遺品をこれからも絶対に【守り】【忘れない】、そして【伝え続けたい】と強く感じました。

8月9日の11:02am、一瞬の雲の切れ間にB29によって落とされた長さ3mを超えるファットマンは、とてつもない熱を発し、地表面の温度は爆心地で3,000~4,000度、1km地点で1,800度、1.5km付近で600度、4km離れたところでも屋外にいた人は熱傷を負うほどだったと記されています。その熱によりあらゆるもの溶かしてしまいました。原爆の恐怖はそれだけではなく、「 α 線」「 β 線」「 γ 線」「中性子線」の四つの放射線があらゆるものを突き抜けて飛んでいき、人々の体に多大な影響を与え、多くの人が巻き込まれました。

爆心地には追悼、慰靈、鎮魂を謳う三角柱の碑石があり、その下には被爆時の地層がそのままの状態でした。爆心地の北東約500m先には浦上天主堂があります。この天主堂も爆風の被害を受け、1959年に修復されましたが、鐘を片方失いました。その後、80年かけて2025年にアメリカから贈られた鐘は、2025年の8月に和解と平和の願いを込めて鐘の音が響きました。そして、爆心地から約1km離れたところに平和記念公園があります。北村西望さんが生涯をかけて作った平和祈念像が、その右手と左手と優しい目で今も平和について訴えかけています。

上で書かせていただいた内容は、日本が受けた被害だけしか書くことができませんでしたが、日本は加害者でもあります。例えば、当時長崎の平和記念公園には刑務所があり、囚人の中には理不尽な理由で連れてこられた中国人や朝鮮人が収容されていて、強制労働をさせられていたと聞きました。ですから、一人一人が歴史と向き合い、国民全員が平和な世界にすることを考え、今後、正しい選択をしていきましょう。



My 平和宣言
～私にできること～

歴史に向き合って世界に
正しい選択を訴えよう！

「戦争体験から学ぶ平和の尊さ」

グループ4

東三鷹学園三鷹市立第六中学校 2年 小舟 杏奈

私は中学生長崎市平和交流派遣事業を通して、平和の尊さを実感しました。そして、これからも平和について考え、歴史を伝え続けていくことが大切だと考えました。

今回は、被爆者である松尾幸子さんの話を聞くことができました。中でも印象的だったのは、水の中で亡くなっていた妊婦さんの話です。翌年まで埋葬されなかつたため、体が腐り、母親の頭蓋骨と赤ちゃんの小さな頭蓋骨が出てきたそうです。赤ちゃんは生まれてくる前に命を奪われ、母親は子供に会えずに命を奪われました。この話を聞いて、戦争は無差別に命を奪う残酷な行為だと感じました。

平和案内人の方によるガイドツアーでは、「平和の泉」が印象に残りました。この泉は、水を求めて亡くなった人のことを想い建設されたそうです。泉の正面にある石碑には「のどが乾いてたまりませんでした。水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました。どうしても水が欲しくてとうとうあぶらの浮いたまま飲みました。」と刻まれています。建設理由とこの一節を読んだとき、悲惨な状況が目に浮かび胸が痛みました。それと同時に、いつでも水を飲める環境で過ごしている自分がいかに恵まれているのかを身に染みて感じました。

被爆地に最も近い中学校である山里中学校の平和部の方々との交流では、東京と長崎の中学校での平和教育の違いに驚きました。私の通う学校では戦争や平和について学び、じっくりと考えたりする機会はほとんどありません。一方で、山里中学校では学年ごとに校外学習を通じて、戦争の悲惨さや平和の大切さについて考える機会があります。また、山里中学校では平和に関する日記や黒本の朗読を通して、平和について発信する「平和部」という生徒会主体の部活動があります。生徒一人一人が戦争や原爆の被害を過去の出来事として捉えるのではなく、関心を持ち続ける姿に感銘を受けました。同じ中学生なのに、戦争について真剣に考え、伝える活動をしている姿勢を見習いたいと思いました。

私は長崎派遣を通して、家族や友達と過ごせて、おなか一杯にご飯を食べられる今の生活はとても平和で、これからも維持していきたいと思いました。戦後80年が経った今、実際に戦争を体験された方からお話を聞くことができる機会はとても貴重です。だからこそ、私たち若い世代が唯一の被爆国で生きる者として、この歴史と被爆体験を次の世代に語り継いでいくことが重要だと思います。



My 平和宣言
～私にできること～

戦争は簡単に命を奪ってしまう
恐ろしい行為であり二度と行って
はいけないということを身近な人
に伝えています！

「長崎平和の維持創作」

グループ4

おおさわ学園三鷹市立第七中学校 2年 横山 翔大

上空500mで爆発したファットマンは天を裂くような閃光を伴って爆発した。80年前の8月9日、長崎を襲ったB29によって投下されたプルトニウム爆弾、通称ファットマンにより、一瞬で数万人の平和を壊したのです。なぜ悲惨な戦争が起きたのか、そして、今の時代に生きる我々が世界平和を実現するためにどのような取り組みをするべきなのか？

今年、原爆が投下されてから80年が経ちました。私は、80年前の遺品を守り続ける必要があると考えました。そして、核兵器を所有する諸国に原爆の危険性を訴えていくことが大切です。

今の長崎の平和公園には当時、刑務所がありました。この刑務所は爆心地からわずか200m程しか離れていなかったため、ここに居た全員が即死しました。さらに、囚人の中に中国人や朝鮮人がいました。その中には、日本に連れて来られ強制労働をさせられていた人や、少しの問題を起こし投獄された人がいたと聞きました。そして冷たい塀の中で、熱い爆風に焼かれ亡くなりました。そんな刑務所跡地には今、平和公園があり、17個のモニュメントと共に平和祈念像が爆心地の方向を見て佇んでいます。平和の像を中心とし、世界の恒久平和を実現できると良いと思います。

そして、今では長崎の観光地として有名な浦上天主堂。この教会も実は戦争の被害を受けた場所です。天主堂は爆心地からわずか500mの距離にありました。今はとても綺麗に管理されていますが、当時は被爆から13年間もそのままの状態で、元は二つあった鐘も一つだけでした。しかし、2025年にアメリカから鐘が贈られ、8月9日にお披露目されました。これは今後【アメリカと日本の平和の証の鐘】として守られると良いと思います。

最後に、平和を創ることです。それは今回の派遣事業のような、実際に現地へ行く機会を創ることなどが挙げられます。しかし、これはただの一部です。平和を創ることは一人ひとりが平和に向き合い、平和な世の中に創り変えたいと思うことではないでしょうか。それにはまず、【伝える】ことが大切です。戦時中11歳だった方のお話を聞くことが出来ました。その方のお話はとても力強いものでした。しかし、この先被爆を記憶している人はさらに少なくなってしまうでしょう。今回のような事業を通して、我々若い世代が平和について学ぶことにより、戦争の悲惨な記憶を伝えていくことが大切です。これから先の未来を明るく、平和な世の中を創りましょう。

My 平和宣言
～私にできること～

平和教育をグローバルに

「平和ってどんなに幸せなことか」

グループ3

おおさわ学園三鷹市立第七中学校 2年 江川 サクラ

私が長崎で学んだことは、「戦争がないことは幸せだ」ということです。これは多くの人が思う、当たり前のことかもしれません。もしかしたら、わざわざ長崎に行かなくても分かることかもしれません。しかし、私は実際に長崎に行って、このことを学んだと思います。

1日目は、平和案内人にガイドツアーをしていただきました。爆心地公園や、当時のまま残された地層、浦上天主堂の落ちてしまった鐘の跡など、当時のことを感じられる場所に行きました。案内人が爆心地公園で、「今立っているこの場所にも、まだ小さい骨や歯が埋まっている」とおっしゃっていて、この地で80年前に、本当に原子爆弾が落とされたんだと実感しました。これは、長崎に行くことでしか感じることのできなかったことだと思います。

2日目は、原爆資料館に行きました。原爆資料館で一番印象に残ったことは、ファットマンの模型が飾られていたことです。大きさは2メートルくらいだろうなと勝手に思っていましたが、実際に展示されていた模型は想像よりもとても大きく、驚きました。もう一つ驚いたのは、実際に触れても良い展示があったことです。被爆する前の瓦と被爆後の瓦や、溶けてしまった瓶など、実際に触れて感じることができたのが印象的でした。

3日目は、11歳の時に被爆された松尾幸子さんという女性にお話を伺うことができました。被爆された時の経験を詳しくお話しいただき、とても勉強になりました。松尾さんは終戦のときの玉音放送を聞いた時、よかったです、やっと終わったと思ったとおっしゃっていました。私は、てっきり日本は国民も戦争一色に染まっていて、負けたと聞いた時、みんな悔しがっていたと思っていたので、驚きました。松尾さんは何回も、「怖かった」とおっしゃっていました。そして、次に伝えていってほしい、とも言っていました。これは、長崎に派遣された私たちが、それを次に伝えていかなくてはならないと思いました。

私が今回の平和派遣事業で学んだことは、「平和の尊さ、戦争の悲惨さ」です。3日間、実際に自分の目でたくさんのことを見て学び、とても貴重な経験になりました。この経験を活かし、戦争を知らない世代に平和と戦争について伝え続けていきたいです。



My 平和宣言
～私にできること～

長崎で学んだことを、
多くの人に伝えています！

「長崎で感じた平和への重みと願い」

グループ4

聖徳学園中学校 2年 岩田 悠慎

僕は、原爆について考えるために被爆地の長崎県に行ってきました。長崎県は昔、原爆の被害を受けたのに嘘みたいに綺麗な街並みでした。そんな長崎県で、印象に残ったことが4点あります。

1点目は、被爆地公園に行ったことです。被爆地公園は街の中心部にあり、この上空500メートル上で原爆を落とされたと聞き、とても驚きました。2点目は、平和公園に行ったことです。平和公園では、平和のモニュメントや平和の泉などがあり、公園の一番奥にはとても大きい平和祈念像がありました。平和祈念像の意味は、右手が上空500メートルで落とされた原爆を、左手は平和を意味していて、僕はこの意味を初めて知り、印象に残りました。3点目は、原爆資料館に行き、原爆の恐ろしさを学んだことです。そこには、実際に原爆で焼けた骨がガラスとくっついているものや、大きい鐘が爆風や熱風により大きく曲がってしまっているものがあり、改めて平和の大切さを感じる機会でした。4点目は、浦上天主堂に行ったことです。浦上天主堂は、爆心地からとても近い場所に建てられていて、被爆当時はほとんどの建物が倒れ、大きく硬い鐘も爆風で150メートル離れた川に落ち、その鐘は当時のまま残されており、今も見ることができます。また、被爆マリア像を見ることができ、当時の出来事が想像できました。

最後に僕の想いです。

2009年にアメリカのオバマ大統領がチェコのプラハで行った演説の中で、「核兵器のない世界」を表現し世界中の注目が集まりました。旧ソ連とともに核開発をリードしてきたアメリカ自ら強い意志を表明したことで、核軍縮、核不拡散に対する国際社会の期待が一気に高まりました。しかし、依然として核兵器の完全廃絶は達成されていません。現在、世界中には核兵器として使用できる核弾頭は約17,000発あると言われています。世界で唯一の戦争被爆国として、二度と原子爆弾が使用されることのないよう、核兵器廃絶に向けて、みなさん一人ひとりの平和への意識を高めていくことが大切ではないでしょうか。また、この出来事を後世に伝えていき、いつかは核兵器がこの世の中から消える日が来るよう願っています。



My 平和宣言
～私にできること～

sns を使ったい僕の身内などにこの戦争や核爆弾について話し合って、後世にこれからも伝えていきたいです

「長崎市平和交流派遣事業を通して」

グループ3

東京都立三鷹中等教育学校 2年 井上 真由子

私たちは今回戦後80年事業として長崎市平和交流派遣事業に参加し、平和案内人によるガイドツアーや現地の中学生との交流会、原爆資料館や被爆体験談などを通し「戦争」と「平和」について改めて考えることができました。私は今回の派遣事業で印象に残ったことが主に2つあります。

1つ目は、原爆資料館に展示されていた原爆投下直後の写真です。資料館の中には今まで見たことのない物が展示されており、原爆によってガラスが刺さり出血した痕が残っている服や原爆を投下したファットマンの模型、爆風によりレンガが全て崩れた浦上天主堂のレプリカなどが展示されていました。その中で特に衝撃を受けたのは、真っ黒こげになった遺体や浦上駅に転がっている母親とまだ幼い子どもの遺体の写真です。事前学習で見た「ナガサキの少年少女たち」や戦争関連の本でも人々が真っ黒になり灰となった、という言葉は聞いたことがあったのですが、自分の目で見たことはなかったので、その写真を見たときの衝撃は大きかったです。また、その写真には、原爆により葉っぱが全て落ち、幹だけになった木や崩壊した沢山の家が写っていて、当時の長崎の町の様子を頭の中でハッキリと想像することができました。

2つ目は、被爆体験談です。私たちは今回、被爆体験談として松尾さんという方のお話を聞くことができました。今回の体験談で松尾さんは、「戦争の愚かと悲惨さ、核兵器の廃絶を多くの人に伝えてほしい」と訴えていました。私は一昨年の夏、焼夷弾により家族を亡くした曾祖母に話を聞いたことがあります、そこで曾祖母は「戦争は二度と繰り返しちゃいけない」と私に強く伝えてくれました。戦争体験者から受け取った戦争のことを伝え、二度と同じ過ちを繰り返してはいけない、という思いを私たち若者が責任をもって後世に伝えていく必要があると思いました。

今回の長崎市平和交流派遣事業を通して、私は戦争の残酷さと悲惨さを改めて実感すると同時に、今までなかつた平和を続ける責任を感じることが出来ました。今回の派遣事業で学んだことを11月にある最終報告会や学校生活でより多くの人に伝えていきたいです。



長崎原爆資料館 所蔵

My 平和宣言
～私にできること～

自分にとっての幸せを感じ
戦争を伝える責任を忘れない

まとめにあたって

「戦後」、という言葉を何気なく使っていました。その言葉の本質は、まさに平和と同義であると、今回の事業を通して実感しました。戦火に見舞われることのない、平和な80年間、私を含めた多くの世代が、生まれたその日から「戦後」の時代を生きてきました。もはや、それが当たり前、という感覚すらなく、何の気なしに使ってきたその言葉の意味を、改めて認識するきっかけにできたことは、今回の事業の一つの成果であると考えています。

「戦中」の日本において、もっとも甚大な被害を受けた地域の一つである長崎の地では、過去から現在まで地続きになっている歴史を感じることができます。写真や文章だけではなく、直接聞いて、触れて感じる歴史は、確かな質量で胸に染み込んできました。今回派遣された中学生の皆様も、きっと同じような感覚を抱かれたことだと思います。

戦争の歴史は人が作ったもの。それを最も濃密に、未来に紡ぐのもまた人なのだと考えます。今まさに世界中で、戦争の火種が燻っています。残酷な戦火に直面している国、地域もあります。昨日、戦火で家族を亡くした人。今日、生き抜けるかもわからない人。明日、誰かの命を奪う人。そんな現実とともに生活している方々も、世界を見渡せば少なくありません。残念ながら、どれだけ平和を願っても、明日のうちに世界から戦争が根絶されることはないでしょう。だからといって、知ることを、考えることを放棄していくはいけない。せめて語り継がなければならない。そんな気持ちがわずかにも芽生える機会となつたとしたら、今回の事業は大きな意味をもつと思います。

今明確な答えは出せなくとも、戦争を知らない私たちがその歴史と現実とに向き合うことで、そこに悲惨な戦争とは違う、尊い何かが生まれていくのではないでしょうか。

令和7年11月 三鷹青年会議所理事長 今井 鼎太

三鷹市戦後 80 年平和事業
中学生長崎市平和交流派遣事業報告書
令和7(2025)年 11 月発行
【編集・発行】
三鷹市企画部企画経営課平和・人権・国際化推進係